

---

# 魔法少女リリカルなのは Sunlight

朱槍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Sunlight

### 【NZコード】

N6465Y

### 【作者名】

朱槍

### 【あらすじ】

武藤カズキは戦い続けた。守りたい人達の為に。長い戦いを経て彼には安息の日々が流れるだろと思っていた。しかし、運命は許さなかつた。彼は全てに決着をつける為に再び武器を手に取る。

## 第1話 最後の任務

墓地

男は墓の前でしゃがみ手を合わせる。

墓の周りには彼の他に男性が2人女性が2人子供が1人いた。

「さてと・・・。」

やがて彼は立ち上がった。

「・・・行くのか?」

2m超の大男ヴィクター＝パワードが彼に言った。

「ああ、皆とは挨拶は済ませたしな。」

そう言って周りを見渡した。

見渡した墓に大切な仲間達の名が刻まれていた。

【剣持 真希士】

【防人 千歳】

【防人 衛】

【中村 剛太】

【武藤 斗貴子】

彼は最後に自分の妻の墓を見詰めた。

「せうか、では俺も行くとしよう。」

「蝶野？」

蝶の仮面を付けた男蝶野 功爵く蝶人パピヨンゝが彼の隣に立つ。

「あいつは俺の人生の楽しみでもあった。」

パピヨンは先程彼が手を合わせていた墓を見る。

### 【武藤 ソウヤ】

墓にはそう刻まれていた。

「それをクソにも劣る理由で横から取り上げられたのだ。  
少々炎を据えてやらねば気が済まん。」

「そつか・・・・・ありがとな蝶野。」

「別にお前に礼を言われる覚えはない。  
パピヨンはそう言つて先に歩き出した。」

「お義父さん・・・・・。」

「爺ちゃん、何処かに行くの?」

女性と9歳位の子供が不安そうな顔で彼を見る。

「ああ。

爺ちゃんは、ちょっとお仕事に行かないといけないんだ。」

「爺ちゃんも居なくなるの?」

少年は涙を溜めた瞳で彼を見る。

彼はしゃがんで少年と田線を合わせながら頭を撫でた。

「大丈夫。

爺ちゃんは、ちゃんと帰つて来るから。」

「でも・・・・父さんは帰つて来なかつた・・・・。」

「・・・・それじゃあ、いつよう。」

すると彼は少年の手を取つてお互いの小指を絡ませた。

「指切りげんまん嘘ついたら針千本の～ます。

・・・・大丈夫、爺ちゃんは絶対に帰るから。」

「・・・・うん。」

少年は頷いた。

すると、もう一人の女性ヴィクトリア＝パワードが彼に訊ねた。

「最後に聞きたいんだけどアナタは【アイツ】をどうする気でいるの？」

「投降の意思が有るなら捕縛して戦団に送る。  
無いなら抹殺するしかない。」

「ふ～ん。

てつきり【息子の仇】として殺すのかと思つた。」

「あいつは最後まで戦士として戦つた。

ならそれを仇だから殺すなんて事をするのは、あいつの生き様に泥を塗る事になる。」

そして彼は何処からか出現した帽子を被り言った。

「だからオレは大戦士長ガーディアン・ブラボーとして、最後の任務。

けじめをつけてくる！」

そして、彼は歩き始めた。

「話は終わったか。」

墓地の入り口でパピヨンは腕を組んで待っていた。

「ああ、行こう。」

「武藤、この件が終わったらお前はどうするつもりだ？」

パピヨンの質問に彼は少し黙りやがて上を向いた。

「今は・・・考えてない。」

でも、そろそろオレは次の世代に任せようと思つてゐる。

「そうか。

では行くか。」

「ああ、決着をつけに・・・。」

彼らは空に飛び立つた。

武藤カズキと蝶野功爵は決戦の地へと向かう。

Kazuki Sides

地下施設

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

大量の化物ホムンクルスがオレ達に向かって襲い掛かる。

「粉碎・ブラボラッショ！！」

オレはバンチの高速ラッシュでホムンクルスを纏めて吹き飛ばす。  
もう何十回目もの迎撃。

そろそろアーツの居場所に着くのも近いかもしれない。

アーテス・ハビネス！！

蝶野も黒色火薬の武装鍊金くニアデス・ハピネスでホムンクルスを一掃する。

「げはああつ！？」

しかし、蝶野も吐血し息を大きく乱している。

そもそも蝶野はこういつた持久戦は大の苦手だ。このまま戦いが長引くほど不利になるのは明らかだ。

再びホムンクルスが襲い掛かって来た。

「いい加減、鬱陶しい！」

緑めて咲き升にしてやる  
ニマギク ザツツ

蝶野？！」

蝶野の体力が限界に近づき膝を着いた。致命的な隙。

オレは慌てて「特殊核鉄改【SS】」を操作して蝶野を守る。しかし、蝶野守った事で出来た隙をホムンクルスがついてきた。

「核鉄えええ！！！核鉄えええええ！！！」

「う！」

攻撃を防ぐ為に胸に手を当て核鉄を起動せよとする。

だが

「イギヤツ?!

「なつ！？」

オレが武装鍊金する前にホムンクルスは腹から真つ一いつに両断された。

すると、斬られたホイムンクルスの後ろに日本刀を持つた貫禄のある老人が立っていた。

そして、オレはこの老人を知っていた。

同時に驚いた。

「し、秋水先輩！？」

「武藤、待たせたな。

これより戦闘に加勢する。」

「どうして、秋水先輩が此処に？！」

「お前達が決着をつけに行くことを姉さんから聞いたんだ。」

「え？

聞いたってこの場所つて仮にも戦団でもトップシークレット・・・

・・・。

「毎度のパターンだろ・・・。」

「ああ・・・。」

頭の中で笑顔で戦団の情報にハックして桜花先輩の顔が浮かんだ。

「けど、正直結構マズい状況だったんで助かりました！」

「ふん、余計な事をするからそういう事になる。」

「助けたのにそりゃないだろ？！」

「！」の蝶人たる俺があの程度で死ぬわけなかろ？。」

もうあれだ、こんなやり取りを数十年も繰り返すと怒る氣も起きないな。

「ところで、よく一人で来れましたね。

オレ達も吹き飛ばしては強引に進む感じだったのに。」

「実は来ているのは俺だけじゃないんだ。」

「そうなんですか！？」

他に誰が・・・・・

そう訊ねている途中で凄まじい破壊音が聞こえた。

何十体ものホムンクルスを吹き飛ばしてそいつは現れた。

「ようやく追い着いたか。」

「ヴィクター！？」

「何でオマエが！？」

「今回の件を少しでも手伝えればと思つてな。  
後をつけさせもらつた。

オマエには借りも多いしな。」

ヴィクターはそう言つて大戦斧の武装鍊金くフェイタルアトラクションへ構える。

「武藤、奴の下までの戦闘は俺達が引き受ける。

今は体力の回復を優先するんだ。」

秋水先輩はオレ達に指示を出し日本刀でホムンクルスを斬り捨てる。

「わかりました。  
お願いします。」

オレ達はこの案に甘えることとした。  
頼もしい一人の戦友のお陰でオレ達はドンドン先へと進む。  
そして

「扉か！」

目の前に鋼鉄の扉が見えてきた。

「間違いない・・・奴がいるな。」

「ああー。」

蝶野の言葉に同意する。

扉の向こうにアイツの存在を感じられた。

「武藤！此処は俺達が死守するーー！」

「オマエは決着をつけて來い。」

「了解！！」

先輩達の援護を背にオレは扉に向かつて走る。

「武装鍊金！－！」

胸に埋め込まれた核鉄。

オレの命を起動させる。

そして、右手に武装が形成される。

突撃槍の武装鍊金くサンライトハート改<sup>2</sup>。

もう数え切れない程の激戦を共に駆け抜けた相棒を握る。

「エネルギー！全！開！－！」

槍はその名の通り太陽の輝きを放つ。

「突き抜けろ！オレの武装鍊金！－！」

鋼鉄の扉は粉々に砕け散る。

そして、扉の先にはアイツがいた。

「ようやく追い詰めたぞ。

外院 碓氷。」

男は名を呼ばれてこちらを向く。

そして、ドブ川が腐った様な目と歪みきつた笑顔で言った。

「やはり、ここまで来ましたか。

大戦士長・・・・・いやブラボー。」

→ Kazuki side end →

「碓氷・・・・・戦団に投降する意思はあるか?」

カズキは鋭い視線で碓氷を睨む。

「ない。

それに貴方自身もこの言葉がお望みではないのか?  
息子の仇を討つ理由が出来た訳ですし。」

「そんな事は関係ない。

オレはこれ以上の犠牲を出させない為に此処に来た。」

カズキのその言葉を聞いた碓氷はさつきまでの表情が嘘の様に消え。  
まるで汚物を見る様な目でカズキを見た。

「相変らずの偽善者振りですね。

まさか、此処には純粋な正義感だけでいるとも言つ氣ですか貴  
方は?」

「・・・・・そうだな、全く私情が無いといえば嘘になる。  
だがそれはソウヤを殺された恨みなんかじゃない。

仲間を裏切り信頼していくれた戦友を騙まし討ちしたオマエに対

する怒りと。

オマエの裏切りに気付けなかつた自分の甘さだ。」

カズキはサンライトハート改を碓氷に構える。

「だから、けじめをつけに来た！」

大戦士長として！！

嘗てのオマエの師として！！

オマエをここで止める！！！」

真っ直ぐな瞳でそう言い放つた。

すると碓氷は感情と言つものが感じられないほど無表情になつた。

彼が聞きたかったのはそんな言葉ではなかつた。

見たかったのはそんな顔ではなかつた。

聞きたかったのは息子を殺され殺意の籠つた叫び。

見たかったのは憎悪を撒き散らす表情。

彼は落胆した。

「そうですか・・・・・・。

では、問答は終わりです・・・・・・死ね。」

すると、部屋の壁を突き破つて6体の大型ホムンクルスが現れる。

「コイツはー？ホムンクルス月華か？！」

「そうです。

嘗て貴方方がムーンフェイスの計画を阻止する時に相手した奴を改良した物です。

名をホムンクルス月華式。」

月華式式は凄まじい威圧感を放ちながら威嚇した。  
しかし、カズキは不適に笑っていた。

「これが、オマエの切り札か碓氷。  
だとしたら……オレをナメ過ぎだ。」

月華式式はその巨大な手でカズキを押し潰そうとする。カズキはそれを余裕で回避する。

そして、コートから核鉄を取り出す。

# 「特殊核鉄」VS 起動！！

カズキの左手に武器が形成され握られる。

カート>の鎌だった。

鎌を月華式式の顔面に突き刺し横に離脱した。

卷之三

サンライトラッシャー！！！！！」

爆発的なエネルギーと加速。

碎した。

残りの3体がカズキを襲う。

しかし、その3体の月華式式の顔を黒い蝶の大群が覆つた。

「またくもつてその通りだ。

そんな骨董品を強化した程度でオレ達を相手にしようとはな。

往け！…黒死の蝶！…！」

黒き蝶の大群が一斉に爆発し月華式式を吹き飛ばす。パピヨンがカズキの近くに着地する。

「蝶野、外のホムンクルスは？」

「粗方片付いたので此方に来た。

・・・・・武藤。」

「ああ。」

カズキは短く返事をすると首元に迫っていた何かを掴む。掴んだのは奇襲を仕掛けてきた碓氷の腕だった。そして、そのまま拳に力を入れる。

「しまつ・・・・・」

「直撃！…ブラボーパンチ！…！」

凄まじい威力で放たれた拳は碓氷を端の壁まで吹き飛ばした。

「げはつ？！…！」

「オマエの鉤爪の武装鍊金【ディメンションポーター】。

特性は空間移動、オマエがこのタイミングで奇襲を仕掛けてくるのは読めてたよ。」

「ぐくつ、相変わらず凄まじい威力ですね・・・・・。ようやく修復した左肩が粉々だ・・・・・。」

碓氷がフラフランと立ち上がる。

しかも殴られた左肩は完全に吹き飛んでい皮一枚で繋がっている様だった。

そしてカズキは吹き飛んだ肩を見て気付いた。  
傷口が人間とは全く別物であることを。

「碓氷・・・オマエやつぱり。」

「ええ・・・ホムンクルスですよ。  
もつとも、パピヨンと同じ不完全なね。」

「何だつて?」

「私は力が欲しいだけだ。  
食人衝動などマイナス以外なんでもない。  
だから私は不完全の方を選んだ。  
別に人間であることに執着もないですし。」

「なるほど、貴様もこのオレと同じく超人になろうとしたか。  
だが・・・貴様如きがオレと同じ存在など虫酸が走る!!--」

パピヨンはニアデス・ハピネスを展開する。  
カズキもサンライトハートを構える。

「大戦士長にその宿敵相手に片腕だけ・・・。  
自殺行為にも程がありますね・・・」  
には退かせてもらいます。」

碓氷がディメンションポーターを構えた。

「逃すと思うか。

それに逃げられたとしても戦団の情報網はオマエも知っているだろつ。

絶対に逃げられやしない。」

カズキがそう言つと碓氷は黙る。

そして・・・

「フフフ・・・」

笑つた。

「何が可笑しい。」

「いや、貴方方はどうやら私の武装鍊金の特性を誤認している様ですね。」

「何だと…？」

「空間移動は本来の特性の副産物！」

本来の特性は・・・」

碓氷が空間を切り裂き裂け目が生まれる。

しかし、その裂け目は過去最大級の大きさだった。

「自らのダメージをエネルギーに変換し次元を超える！  
そして、ソウヤと貴方の攻撃でようやく溜まりましたよーー！  
世界を超えるほどのエネルギーがねーーー！」

「世界を・・・超えるだとーー？」

「ソウヤに超・蝶・成体の外殻は破壊されたが核はまだ生きている！  
こいつの修復も核鉄の研究も新たな世界でするとしようーー！  
さらばだーーーガーディアン・ブラボーーーー！」

碓氷は裂け目に入つていく。

超・蝶・成体の修復や核鉄の研究を他の世界で行う。  
それはこの世界の火種をこの世界に持ち込むという事。  
そしてそれは、その世界に住む全く関係ない人々を地獄に叩き落とすという事だ。

そんな事を力ズキが許すはずがなかつた。

「そんな事・・・させるものかああああああああああああああああ  
ああああああああああーーー！」

力ズキは閉じよつとする裂け目に突撃する。

次の瞬間・・・

カツ

凄まじい爆発が起きた。

「くつ！？」

武藤オオオオオオオオオオ！？？」

爆発が収まる。

徐々に舞っていた煙が晴れ始める。

そして

其処には何もなかつた。

## 第1話 最後の任務（後書き）

どうも皆様！

初めての方は、はじめまして！

どこかで他の作品を読んだ事がある方は、また会いましたね！  
作者の朱槍でござります。

え～、今回の話で色々とツッコミたい所が多くあつたと思われます  
が暫し待って頂きたいとお願い申し上げます。

カズキ君とかの設定は次回の【第2話 追憶】で明らかにしていく  
つもりです。

それと同時にキャラクター設定とかも投降しますので勘弁して下さい。

さて、この作品を書いた切っ掛けですがなのはと武装錬金のクロス  
ssを探しても殆ど見付からなかつたので「強請るな！書き込め！  
さらば『えりれん！！』そんなノリで誰かが書くの待つてないで自  
分で書くことにしました。

さて、それでは機会があれば皆様また次回。

- ・・・え、リリカルキャラはいつ出るかだつて？
- ・・・・・・・もう1話だけ我慢してくれ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6465y/>

魔法少女リリカルなのは Sunlight

2011年11月20日16時28分発行